参考資料１

第４回滋賀県基本構想審議会（7/19）における主な意見

（基本理念について）

- 「人生100年時代　滋賀で幸せに生きる　つくる　そだてる　わかちあう」ということは大事だと思う。

- 「幸せ」という言葉について、「健康でなければいけない」というような前回感じたニュアンスは無くなっている。

- 「未知」「変化」がマイナス感が出すぎている気がする。本来、「未知」「変化」はわくわくするもの。もっとポジティブに書けるのではないか。

- 人口減少と高齢化が進む中で、新しい公共の担い手として、みんなが役割を持ち、自分たちの地域を守る。そういう人がたくさん育っていることが大切なのではないか。個の幸せとみんなで幸せを追求するという視点、両方の実現を書いてもらえないか。

- 「健康な胃を持つ者は胃の存在を語らない」という言葉がある。幸せも同様で、幸せ、健康について語る必要がないようなことが理想ではないか。

- 幸せを理念にすると、モチベーションが持てないのではないか。「楽しい」など、自分のことに置き換えられる動詞の方がいいのでは。

- 基本理念が長く、覚えられない。これを一言で言えることに価値がある。

（県の役割、多様な主体の役割について）

- 県の政策とするところもあれば多様な主体が担うところもあるので、みんながどのように関わっていくのか書かないといけないのではないか。

- 役割があることで元気になれるので、県民に期待することがあるといいのかなと思う。それならば一緒にできる、という方も出てくるかもしれない。一緒にやろう、我々(県)はこれをやる、というのがあってもいいのかもしれない。

- 行政への参加の窓口が開かれているのは重要で、構想に書き込むべき。ただ、「協働」とか書いても子どもにはわからないので、「1人でできること」「10人でできること」「1000人でできること」・・・などと単位を分けて示せば、これはみんなで、企業と、行政を巻き込んで、など子どもでもスケールが理解できるのではないか。

- 自分事としてとらえるため、対象を「この人向け」とするのも手ではないか。自分が関係するのはどこか、と思えるような手法。

- みんなが、楽に構想にコミットできる方法を考えることも重要。

（進捗管理について）

- 目標を高く置くのはいいが、指標で進捗を毎年度チェックするのは困難ではないか。実施計画においては必要であると思うが、基本構想ではしなくてもよいのではないか。

- 評価を毎年するのは困難。数値で表しにくいものもある。映像化するなど、評価の仕方、ものさしを考える余地があるのでないか。

（全体の構成）

- SDGsの視点によって基本構想を作っていると言っているが、現段階の案を見る限り、それほどSDGsというわけではない。

- 2030の姿が描かれているので、それを169のターゲットからみてトレードオフの関係にあるものを挙げておいて、そこから考えられる対策を書き込んでおく必要があるのではないか。そうすれば、SDGsを県政に組み込んだモデルとして発信することができるのではないか。

- リスク対応型の計画は、平均点は上がるのかもしれないが、滋賀らしさを活かす方が県民になじみやすいのではないか。

- 発信の方法について、新しいことをやっているのに、20世紀型になってしまっているので、今のままの書き方では、あまり伝わらない。

（滋賀らしさとは）

- 滋賀の特徴として、自然環境など、理系の力が強いのではないか。反面、環境を守り、水を提供しているのに、京都や大阪へのアピールが弱いようにも感じる。

- 滋賀らしさという点で、滋賀の県民性は、「やさしい」「まじめ」「慎重」ということと、豊かさに起因するのかもしれないが、「他者を拒絶しない」ということが挙げられるのではないか。外部から入ってきた風を受け止めて、変化できるという特徴があるのではないか。

- 滋賀らしさは、福祉、ボランティアが進んでいる点、性格が穏やか、という点が挙げられるのではないか。

- 滋賀らしさについては、身近に自然も現場もあるのは、東京に比べて恵まれたところ。実体験のしやすさ、現場への適用といったアクセスの近さが一つ。

- 滋賀には三方よしという言葉がある。このような言葉を使ってアピールしてはどうか。

（その他（表現、具体的な施策等））

- 滋賀の地域差を考慮するべき。

- 「我が国」というワードは「日本」とした方が良い。

- 外国人について、経済のところで出てくるが、労働者としてとらえるのではなく、住民としてとらえる必要があるのではないか。多様性を認める基盤として発信することが重要。

- 「誰にでも居場所がある」とすると、「役割を果たしてなくて存在している」という感覚があるので、「居場所がある」というよりも「誰にでも役割がある」という方が、主体性があっていいのではないか。

- 今回の素案では、「地産地消」という言葉が消えている。エネルギーの地産地消。

- 県が、こんなこともしてあげる、あんなこともしてあげる、だけでなく、どんな人に育ってほしい、ということを書くのはどうか、人権教育や環境教育など、人づくりに力を入れてほしい。

- 子ども食堂は貧困対策だけではなく、コミュニティの場という面がある。クローズドな部分（貧困対策等）と、オープンな部分（居場所を見つける、新しいコミュニティの場）のどちらもそれぞれ必要。

- 子どもは、知っている大人の数が多いほど自信を持つことができる。子どもたちが大人と出会える場がたくさん必要。

- 女性が住みやすい街というのは、つながりがある、キャリアの転換が容易にできる、高齢の女性が一人でも生きていけるようなインフラが存在する、働くときに育児出産を考えずにすむ、というようなことが挙げられる。そのためには子どものころから、「男だから」「女だから」ではなく、一人の人間だから、という教育がされることが重要ではないか。
構想の中では、性差、障害の有無、高齢である、子どもである、ということが重要ではなく、その人がその時にどのようなパフォーマンスを発揮できるのかということでとらえる必要があるのではないか。

- ICT、AI、ロボット等、マスコミでは賑やかに飛び交っているが、実際のところどうかというと、逆に、無機質でなく人の手が入ることによる付加価値もある。
　現場の数だけ、AIと人の関わり方のバランスが今どうなっているか、将来どうあるべきか、という調整をしていくことが避けられない。

- 1次産業、2次産業、3次産業を通して何が不足しているかを考えたときに、「データ」が挙げられる。正確性が求められるデータというのは、行政が責任を持って整備、公開し、みんなに役立ててほしい。利用できる人が上手く利用すれば、情報が上手く流れ、ビジネスや経済の循環が生まれるのではないか。

- 県内には大学がいくつもあるが、住んでいる学生は少ない。京都や大阪から来ている学生に、滋賀を第2の故郷としてほしい。また、県外に出て行った人に戻ってきてもらう取り組みも必要。

- 小さい時から地域と触れ合うことで、地元へのプライドを持ち、地域のコミュニティも充実させてはどうか。

- 国体で整備した施設について、国体後に、イベントホールなどとして活用してはどうか。

- 林業の人材としては、プロも必要だが、セミプロも必要。

- 働き手が不足。外国人や、都市部から移り住まれる方もある。新たに来られた方と、もともと住んでおられる方とのコミュニケーションが必要。

- 環境は大切なことであるが、その環境を汚している大きな原因が農業である。それらを両立させる取組にどうシフトしていくか。変わっていかないといけない。